

ネパール支援活動によるサービスラーニングの可能性とその考察

Practice of Volunteer Activities in Nepal as Global Service-Learning

澤崎敏文
Toshifumi SAWAZAKI
仁愛女子短期大学
Jin-ai Women's College

Email: sawazaki@jin-ai.ac.jp

あらまし：これまで、学生がリアリティを持って学習できる環境を構築するため、地元企業・行政機関等と連携した地域課題の解決等による PBL 型の授業を実践してきた。今回は 2017 年 2 月にネパール山岳地域の小学校にて実施した本学学生の自発的活動である教育交流・ボランティア活動をとおして、PBL としてのサービスラーニング(奉仕活動等による学習)のあり方、学習成果等とその可能性について考察する。

キーワード：サービスラーニング、アクティブラーニング、PBL、SECI モデル、授業設計、授業実践

1. はじめに

ここ数年、本学で実施している学生意識調査の結果から、「将来の見通しが無い」との回答が増加傾向にある。これらは、本学だけに限った課題ではない。一般に、「基礎学力」「学習意欲」「将来への意欲」が低い最近の大学生に対して、主体的で深い学びを創発させるためには、職場や市民生活における「リアルな課題」に取り組みせ、プロセスの中で評価することが重要であるといわれる。それらを解決するために、学生がリアリティを持って学習できるような PBL 型授業の設計方法の構築に継続的に取り組んでいるところであるが、昨年度、学生の提案からネパールでの海外支援活動を計画することになり、本稿では、これら活動をサービスラーニングとして継続かつ制度化できる可能性について考察する。

2. 活動の位置づけとプロジェクト設計

本学では、これまでも、コミュニケーション演習 I, II 等の授業にて、企業・行政等と連携した PBL 型授業を実践しており、グループワークも多用したアクティブラーニング型で授業を行っている。しかし、今回の海外支援活動のプロジェクトは学生が自主的に行う課外活動がきっかけであり、これらをサービスラーニングという形でどのように位置づけていくべきかについて、以下の 3 つのステップに分けて、それぞれの学習過程でどのような内容に取り組むべきかを踏まえながらプロジェクトデザインを行った。

1. 準備段階 (2016 年 9 月～2017 年 1 月末)
2. 実行段階 (2017 年 2 月 15 日出国～22 日帰国)
3. 終了後の振り返り (2017 年 2 月末～)

サービスラーニングでは一般に、学生が教室で得た知識を地域社会において活用できるような貢献活動が望まれること、また、地域社会、学生(大学)双方に何らかのメリットが必要であると言われてお

り、各段階での取り組みには、ジョージア大学のサービスラーニングに関する調査報告書「A Survey of Best Practices of Global Service-Learning Programs in UGA(2009)」の「海外でサービスラーニングを実施するにあたって重要となる要素 (Essential Elements of Global Service-Learning)」を参考に、それぞれの段階においてのプロジェクトデザインのチェックリストとして活用を行った。

1. Interdisciplinary
2. Orientation to Local Culture
3. Engagement
4. Collaboration
5. Application of Knowledge
6. Satisfies a need defined by the community
7. Reflection of experiences
8. Sustainability
9. Flexibility and Variety

また、本プロジェクト終了後は、本学の社会活動実践に関する単位制度を利用し、本活動が単位化できるような学内手続きを行うことで、授業と同等の評価ができるような環境を整えた。

3. ネパールでの支援活動の様子

研究室では、このプロジェクト以前から、ネパールへの支援・交流活動に取り組んでおり、今回はその活動写真を見た学生らの申し出により、本プロジェクトの企画が実現した。2016 年 9 月末の学生の申し出から 3 月の振り返り(報告書)までの流れは以下のとおり。

3.1 準備段階 - Preparation

9 月末に学生からの支援活動への申し出があり、その後、10 月上旬に福井ネパール会、岐阜ネパール会を通じて、現地で長年支援活動を行っている筋田氏に今回のプロジェクトを打診。現地ではどのような支援活動が求められており、日本から協力できる

こと、学生でどこまで支援活動が可能であるか等の確認、調査を実施した(6. Satisfies a need defined by the community). 実際に支援活動を行った2月直前まで連絡を取り合い、現地の支援ニーズとのかい離がないような調整を行った。

また、11月下旬からは、活動地域となるネパールについての学習会を開始。文化・風習、言葉や民族的な違い、政治や経済の状況についての学習活動を行った(2. Orientation to Local Culture).

日本からネパール、そして現地での主な支援内容としては、支援物資を山岳地域の小学校に運搬、配布することが主であるが、それらに加えて、現地の小学校にて日本の文化、日本語に関する授業を行うことも計画された。そのため、12月上旬から、参加学生らが大学で学んだことを、今回の活動にどのように活かすことができるのか等を踏まえた支援内容について検討を行った(5. Application of Knowledge). 参加した学生はいずれも生活情報専攻所属(主にICT、コミュニケーション、ビジネス等を学習)であり、それぞれの得意分野を活かして、日本語学習や日本の文化を理解してもらうための教材作成を行った。

教材作成に関しては、学校が山岳地域にあり、震災の影響もあることから、パソコンやプロジェクターが使えるような環境ではないため、それらがなくても継続的に利用できるような教材作成を考案した。また、出発直前の1月末には学生自身でのビザ申請をインターネットで実施した。



写真1 作成した教材を使って授業をする様子

3.2 実行段階 - Activities as Service

出発直前、日本の支援拠点(岐阜県)から支援物資が大学(福井県)に送付され、運搬する物資の確認作業を実施。その後、2月15日に出国して帰国した22日までの8日間についての活動は以下の通り(3. Engagement / 4. Collaboration).

- ✓ 到着後、カトマンズ西部の町サンガにある現地の支援拠点「銀杏旅館」に移動。打ち合わせの後、支援物資の仕分け作業を実施。
- ✓ 翌日、サンガから今回の活動場所であるラムチェ村への移動。道中、事故等による道路の通行止め等にも見舞われ、予定よりも遅れて

現地に到着。同日、支援先の小学校にて今回の支援の趣旨説明、支援物資の配布等の実施。

- ✓ 翌日以降、ラムチェ村および小学校での交流活動、日本語授業を実施。
- ✓ 再び、サンガの支援拠点に戻り、反省会(振り返り)の実施。



写真2 ラムチェ村の小学校での授業および交流

滞在中は、他の学生ボランティア団体のメンバーとの交流もあり、また、現地での日程変更など、様々な変化に臨機応変に対応するなど、リアルな課題解決の機会に恵まれた(9. Flexibility and Variety).

3.3 終了後の振り返り - Reflection / Report

ネパールでの支援拠点での振り返りに加えて、帰国後、活動についての振り返りを実施(7. Reflection of Experiences). 参加したメンバー各自で報告書にまとめ、最終的に社会活動実践の単位申請を大学に行った。また、6月下旬には参加学生への追加ヒアリング等の実施を予定している。

4. まとめ・今後の課題

今回のプロジェクトから、支援活動を通じたサービスラーニングの可能性について、以下の3点を今後の課題として考える。

- 1) 学生の自主的・主体的な意思により実施されるための環境整備
 - 2) 活動をサービスラーニングとして評価するための標準的な指標や基準の確立
 - 3) 活動が一時的でなく、永続的(8. Sustainability)となるような仕組みづくり(特に海外支援の場合)
- 今後、活動時に関係者間での情報共有を含めたサービスラーニングに特化した支援システムの必要性、開発等の検討もしていきたいと考えている。

参考文献

- Deborah Gonzalez, A Survey of Best Practices of Global Service-Learning Programs in UGA, Office of Service-Learning, University of Georgia, pp10-11 (2009)
- Robert G. Bringle, Julie A. Hatcher, Implementing Service Learning in Higher Education, Journal of Higher Education Vol. 67, No.2 (1996)